ナジア・ハンター 1

いき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナジア・ハンター 1

【Nコード】

N7434M

【作者名】

いき

【あらすじ】

イギリス人の少年ユーリは、異世界の住人であるリューフィンと同居していた。
人間と幻妖の異色コンビによるアクションファンタジー。

プロローグ

『武器をとれ。居場所は守るものではなく常に勝ち取るべきものである。その手段は戦うことをおいて他にない』

ハルダイン教『戦の書』より

路上を走るのは炎の塊。

夏の夜空を赤々と染めるその光景は幻想的だった。

「あついよ。たすけて」

昨日までビル群や家々が建ち並んでいたはずの街。

いま視界を埋めつくすのはビルよりさらに背の高い炎のジャンクル。

「おとうさん。おかあさん」

迷子だろうか。炎熱たぎる路上に取り残された小さな男の子。栗色の髪は煤で黒ずみ、白い顔も煤と涙で汚れ、服はところどころ焦げている。

他の者は皆避難したのか、それとも死んでしまったのか。車一台、人っ子ひとり見当たらない熱波地獄の中、幼い少年を炎と煙が取り囲む。

「あついよ。だれか……」

もはや少年は行くも戻るもできず、その場にしゃがみこんだまま幼い命を焼き尽くされようとしていた。

風が吹き、周囲の炎がまるで腕を伸ばすかのように少年に迫る。

「うあ……あ！」

爆発音が轟いた。

近くに駐められていた車のガソリンに引火したようだ。

それがきっかけとなった。

ひとときわ高く噴き上がる炎が、少年目掛けて倒れ込んできたのだ。炎そのものではない。燃え上がったどこかの家の塀なのかも知れない。

もう少年には声を出す気力もない。ただきつく目を閉じる。

逃げ場のない少年の頭上を、燃え上がる塀が覆い尽くす。

本編

「うわああ！」

見開いた目に眩しい光が飛び込む。炎ではない。

やがて停止していた思考回路が働き始める。そうだ、ここは俺の部屋。

「……。また同じ夢か」

俺はユーリ・ウィルソン、十六歳。両親の離婚を経験しているが、俺を引き取った母は再婚し、新しい父と妹ができた。今は親元を離れて独り暮らしをしている。

夢で見た街は十年前に離婚前の両親と一緒に住んでいた場所。街が燃えた事実はなく、あの夢は俺の実体験ではない。

「なんであんな夢ばっか見るかな。リアルに熱いし」
今日はまだいい方だ。

あそこで起きられないと、銀色の鋭い物 多分剣だろう が
炎の壁を両断する。誰かが助けしてくれたのかとほっとするのも束の間、その銀色の剣に斬られて目が覚める。そこまで夢を見た時は、起きてからしばらくは右肩から左の腰にかけて鋭い痛みを感じるようになるのだ。実際に血が流れたりはしないけれども。

「おはよう、ユーリ。今朝もうなされてたわね。凄い寝汗よ」

ベッドの上に身体を起こした俺の視界を、真新しいタオルが遮る。
「ふがつ」

忘れていた。同居人がいたことを。

「気色悪いことしてんじゃねえ、リユーフィン！ お前、オスだろ
うが」

「あれ？ 現実世界じゃ、男は同居人にこういう風に起こしてもら
うんじゃないのか。ああ、照れてるのか。いいぜ、今度お前が先に
起きた時にはお前がこんな風に起こし」

「できるか、どアホ！」

タオルを投げつけた。リユーフィンはそれをひらりと避け、天井近くで静止する。

高さと幅は、長い部分がそれぞれ約一メートル。顔と尻尾を持つ、全身緑色の植物のような外見。実際、鉢植えの中でじっとしていれば観葉植物のモンステラにしか見えない。そう、リユーフィンは人間ではない。もつと言え、この世界の住人ではないのだ。

俺たちの住む世界が仮に現実世界だとするなら、互いに交じり合うことのない夢幻世界と呼ぶべき世界も同時に存在しているらしいところが、両方の世界の住人の中には、ごく稀に現実・夢幻両世界の間、『^{ナジール}幻実世界』という空間を作り出し、行き来する能力を持つ者がいるという。

リユーフィンによると、俺はその能力を持つ者。ナジアであり、無自覚に能力を発動し、リユーフィンをここに連れてきてしまったという。それが本当ならリユーフィンには気の毒な話だが、彼に謝るのは事実を確かめてからだ。たしかにリユーフィンは珍しい生き物だが、この世界の物ではないと決まったわけでもない。

ベッドからおりて着替えつつ、俺はリユーフィンに聞いてみた。

「一体どこで聞いたんだ、そんなしょーもない話」

「ユーリのパソコン」

俺は頭を抱えた。

「インターネットか。ネットの情報は半分くらい嘘だと思え」

「なんだそれ。もしかして人間って役に立たないものが好きなのか」
一瞬、返す言葉をなくした。

俺はいったんリユーフィンから目を逸らして着替えを済ませ、もう一度見上げて言ってやった。

「んー、そうかも。だから俺、お前のこと気に入ってるのかもな」

「……。そうか。そんなに気に入ってくれてるなら、毎朝今朝みたいな起こし方してやろう」

「待て待て待て！俺が悪かった反省してるかんべんしてくれ」

悔しいが認めざるを得ない。リユーフィンの方が一枚上手だ。身

体はちつこいが、俺の倍は生きていらしいのだ。

キイイイン！

突然の耳鳴り。俺は両耳を塞いでベッド脇にしゃがみ込んだ。

周囲は一瞬真つ暗になり、次いでグレーの空間が広がった。

ベッドもなければ天井もない。ここは最早俺の部屋ではない。

思い出した。たしか前回もこんな感じだった。そして、グレーの空間の中でリユーフィンと出会ったのだ。

そう、ここはナジール。俺が作った空間ではないが、ナジールに来るのはこれで二回目だ。

「なんだリユーフィン。お前もナジールと現実を行き来できるんじゃないか。だったらいつまでも俺の部屋にいないでとっとと出て行けばよか」

俺の言葉を遮り、リユーフィンは鋭い口調で警告した。

「俺はナジアじゃねえんだ、ナジールと現実世界の行き来なんてできねえ。それより、見るよ正面。ワケわからんが、変な顔した奴がこっちを睨んでるぜ」

目を懲らすと、確かに正面にそいつがいた。一見したところ、人間の女の子だ。髪型はポニーテールだが、髪の左右に垂れる羽根形の髪飾りは、まるでどこかの国の先住民が身に着ける民族衣装のようだ。

顔の半分を奇妙な仮面で隠しているが、見えている部分だけを見ても整った顔立ちだということがわかる。歳は俺と同じくらいか。しかし、せつかく見えている方の顔にも、目の下に道化のようなペイントを施している。そして何よりも、突き刺すような視線に強烈な殺気を込めてこちらを睨んでいる。それらを総合して、リユーフィンは“変な顔”との評価を下したようだ。

彼女は普通のジーンズを穿き、青いケープを着ているが、それ自体はとりたてて奇抜なファッションだとは思わない。ただ、背に担いでいる物が異様だった。

それは冗談のように大きな鎌　そう、まるで死神のイメージイラストなどでよく見かける大鎌だ。

唐突に気付いた。彼女は大鎌を担いでいるわけではない。振り上げているのだ。自分は命を狙われている。そう気付いても、なんだか実感が湧いてこない。

「俺、なんか女の子に恨みを買うようなことしたっけかなあ」

「呑気に冗談言ってる場合じゃないぜ、ユーリ！　あの殺気はただごとじゃねえ。とっとと現実世界に逃げ込もうぜ」

大鎌女が間合いを詰め始めた。近づくにつれ、殺気が物理的な圧力と化して俺の身体にのしかかる。実際に息苦しさを感じ始め、ようやく俺は生命の危機に直面していることを実感してぞっとした。

三秒、四秒。意地悪なほど時間がゆっくりと流れる。

「何やってんだユーリ！　早く現実　」

「さつきからやってる」

大鎌女が声を立てて笑った。

「無駄だ。私は夢幻世界に住むナジア。これはお前が作ったナジールじゃないからな、簡単には逃がさないぞ。私はお前たち現実世界のナジアを狩る　ナジア・ハンターだ」

鈴が鳴るような綺麗な声。こんな娘が俺を殺しに来た？　ミスマツチが非現実感を誘い、それまで感じていた恐怖が薄れていく
ああ、やっぱりこれは夢なんだ。

「残念だったな、ナジア。夢なんかじゃないぞ。悪いがその命、もらい受ける」

相変わらず鈴の鳴る声で語りかけ、大鎌女は俺の右肩口へと大鎌を振り下ろした。

切っ先を見つめた刹那、ビデオのスロー再生を見ているように相手の動きが緩慢になった。

刃先が迫る。正確に、俺の肩を目掛けて。あと六十センチというところか。

きつと、火事の夢の続きのように、斬られて血が噴き出したところ

るで目が覚めるんだ。汗びっしょりかいて。ああ、しばらく痛みが続くのは憂鬱だな。三十センチまで迫った。

「ぼーっとしてんじゃねえ、この馬鹿」

変だな。大鎌はスロー再生なのに、リユーフィンの声は普通に聞こえる。

リユーフィンの尻尾が俺の胴体に巻き付いた。

スロー再生だというのに、遊園地のコーヒーカーップにでも乗っているかのように景色が流れる。

あれ。この景色って、夢で見たあの街の火事……。色もなければ熱さも感じない。たとえるなら、美術館の中で周囲の壁に白黒写真を貼り付けて眺めているような。

おっと、今はじっくり観察している場合ではない。敵に視線を戻す。

大鎌女は武器を振り降ろし続けている。なるほど、あいつだけスロー再生なのか。

「ナジールは夢じゃ……。ないんだ……。ぞ。あんな……。大鎌に切り裂かれたら……。死ぬぞ」

リユーフィンの息が上がっている。こんな小さな身体で俺を振り回したんだから当然か。

「ありがとう。でもあいつ、何でスローモーションなんだ？」

リユーフィンはひとつ深呼吸すると、落ち着いたのか普通に話せるようになった。

「そいつがユーリ、お前の能力なんだよ。これではつきりした。ユーリについていった甲斐があったぜ。お前にはこの先、あの女みたいなナジア・ハンターどもから現実世界のナジアを守る、ナジア・ガードとして戦ってもらおう。俺の相棒として、な」

……は？

「なに勝手に人の進路決めてくれちゃってんの？ それバイト？

バイト代出るの？ 俺まだ学生なんですけど。それに戦うなんて嫌だし」

「お前の口はマシンガンか……。俺に反撃する前に、あの女をどうにかした方がいいと思うぜ。お前はあの女の時間を減速したのか、俺たちの方を加速したのか知らんが、その効果がそろそろ切れる」
大鎌女が振り向いた。その動きには、さっきまでの緩慢さが無い。時間の流れ方が元に戻ったようだ。

「ナジールから脱出できない以上あいつと戦うしかないぜ、ユーリ」
「うるさい！ 人間には話し合いという平和的解決策があるっ」

俺は大鎌女に呼びかけた。

「おい大鎌女っ。何を殺気立っているのか知らんが、俺は命を狙われるようなことをした覚えはない。まずは話を聞け！ ……」
「か、俺は何も知らないから、お前の知ってることを教えろ」

「瞬間移動か？ 面白い技を使う奴だ。だが、次はない。覚悟するんだな」

なにアイツ。俺の話ぜんっぜん聞いてない。大鎌女はじりじりと最初より慎重に間合いをつめてくる。

後退りしようとしたが軽く目眩がした。理由はわからないが、百メートルほど泳いだ直後のように体がだるい。もう一度あの大鎌女を振り下ろされたら……。

「ま、待てっば！ 日本という国じゃ、果たし合いとかする前に名乗り合うのが礼儀って言うぜ。せめてお前の名前くらい教える」
「アホかユーリ。いきなり大鎌で襲ってくる相手だぞ。力を貸してやるからさくつとやっつけて、ユーリの部屋に戻ろっぜ」

俺を振り回すだけで息が上がるような奴から“力を貸す”って言われてもねえ……。

「おわ」

リユーフィンは俺の右腕に巻き付いてきた。ぐるぐると身体を捻らせ、その先端は俺の指先からはみ出していく。そしてメートルほどはみ出した先端が針のように鋭く尖った。

「ケイティ。それが私の名だ。苗字はない。日本か。その国の言い方に倣うなら、“冥土の土産に持っていけ”」

こいつたしか夢幻世界のナジアとか言っただけ。こいつにしろリユーフィンにしろいろと知っていやがるようだが、何も知らない俺が命を狙われるってのはむかつくぜ、全く。

「ユーリ・ウィルソンだ」

今や俺の剣と化したリユーフィンが、切っ先を鋭く光らせた。余計な演出はいらないっての。

「ふ。やる気になったか。だが、お前の名は知ってるよ。最初からお前をターゲットに、私のナジールに引きずり込んだんだからな」
「熱烈な歓迎、痛み入るぜまったく」

どうしてもこの女の子　ケイティとチャンバラしなきゃいけないようだ。しかしヤバイな、俺はフェンシングも日本の剣道もやったことないってのに。

（力を貸すって言っただろ、ユーリ。お前は俺のことを“何よりも硬い剣”だと思ってる。それだけで勝てる）

「そりゃ一体なんの気休めだよ。もしまた時間を操作しろって言うのなら勘弁してくれよ、リユーフィン。どうしてあんなことできたのかわかんねえし、なんだか全身がだるいんだ」

（長いこと時間を操作するからだ。ぎりぎりまで我慢して、ほんの一瞬だけ使うようにしないと体力が保たないぜ）

「仕方ないだろ、自覚してやったわけじゃないんだし」

ケイティが踏み込んできた。

「覚悟！」

魂を刈り取るという死神の大鎌さながらの武器。その切っ先が再び俺に迫る。

さっきと違い、スロー再生状態にはならない。

飛び退った俺の右頬から顎にかけて、汗とは違う液体が滴る。遅れて鋭い痛みを感じた。

かすりもしなかったはずなのに、風圧だけで切ったというのか。

「冗談じゃない。あんな鋭い武器を、観葉植物もどきでどう受け止めろというんだ。」

(アホ！ だから俺は硬いんだって)

ケイティは休まず、大鎌を下から振り上げてきた。

俺は反射的に、リューフィンを盾にすべく振り下ろす。

「うわあっ」

あろうことが、リューフィンは刀身を九十度に折り曲げ、大鎌を避けてしまった。

眼前すれすれを通過する、銀色の刃。

振り上げる場合は速度不足なのか、今度は風圧だけで切り裂かれることはない。

「硬いつてのは嘘かつ」

(アホ、お前が硬いつて信じてくれなきゃ俺は柔らかいままなんだってば)

ケイティはそんな俺たちに蔑むような、それでいてどこか哀れむような目を向け、大鎌を構えた。

「強いと聞いていたが、間違いだったようだな。せめて一撃で苦しまずにすむようにしてやる」

ケイティの眼光がざらりと光る。

また、あのかまいたちのような一撃が振り下ろされる。

このまま無抵抗に切り裂かれるなんてごめんだ。

大鎌の切っ先を睨み付けた。

「しめた！」

スロー再生だ。

逃げようと思ったが、足が動かない。服を着たまま水中を歩くかのように体中が重いのだ。

こうなったらリューフィんに賭けるしかない。リューフィンは硬い。リューフィンは硬い。

「リューフィンは硬いつ」

俺は右腕を振り上げた。

いつの間にか強く緑色に輝いていたリューフィン。振った軌跡に残像を描く。

緑色の光が大鎌を迎撃した。

俺はリユーフィンを振り抜く。

まるで紙でも切るかのように、リユーフィンはほぼ無抵抗に大鎌の刃を貫き、両断してしまった。

（時間の操作をやめる、ユーリ。立てなくなったら反撃されるぞ）
「どうやったら元に戻るかわかんないんだってば」

反撃させなきゃいいんだ。女の子を殴るなんてできないし。

俺はケイティの手から大鎌を引き抜こうとした。動かない。どんな握力してるんだ、この子は。

ケイティの拳ぎりぎり目掛け、リユーフィンを振り下ろした。それをもう一度繰り返し、拳の内側の柄のみを残し、大鎌を切り落とした。

「悪いが縛らせてもらおう」

俺はケイティの髪飾りを引き抜き、それで彼女を後ろ手に縛り上げた。

まだ安心できない。ケイティの身体をゆっくり寝かせてやると、足首も縛り上げた。

時間の流れ方が元に戻った。音を立て、大鎌が地面に落ちる。

「な！？ 貴様、何をしたっ」

ケイティは驚愕の表情で叫び、拘束されていることに気付いてもがいた。

俺はその場につくりと膝をついた。全身が疲れ切って、満足に言葉が出ない。

「これで勝ったつもりか。だが、私ごとと戦っただけでそれほど疲れるようでは望みはないな。あの方は必ずお前たちの現実世界を手に入れるぞ」

あの方だと。汗が目に入った。ひりひりする目を強引にこじ開け、ケイティを睨む。

「な！」

口から液体を流し、ケイティはことごときれていた。

「自殺……」

「違う、自己破壊だ。こいつ、人間じゃねーし」

観葉植物に戻ったリユーフィンが言った。

「……誰が観葉植物だって？」

ありや。声に出しちゃったかな、今の。

「口から出てるの血じゃないな。黒いし」

「オイルだ。こいつ、アンドロイドだから」

いきなりSFかよ。もうなんでも来い、だ。

「しかし、アンドロイドのくせに髪飾りひとつ引きちぎれないのか」

「ユーリ、お前は加速中すげえパワーが出てるんだってば。あの髪飾り、とんでもなく硬いんだぜ」

ふーん。

「で、色々と厄介なことに巻き込まれたっばいんだけど、俺。説明してくれるんだよね、リユーフィン君」

「ああ、まずはユーリの部屋に戻ってから、な」

「さっきは戻れなかったぞ」

「やってみてから言え。このナジールを作ったアンドロイドが壊れても、空間は維持したままだろ。今はこの空間をユーリが支配してんだよ」

俺は自分の部屋を思い浮かべ、そこに戻るよう強く念じた。

キイイイン！

突然の耳鳴り。俺は両耳を塞いでベッド脇にしゃがみ込んだ。

「ベッドだ。俺の部屋だ。……ってか、夢だよね、今の。夢であってくれ」

わかってたけど言ってみた。

「夢じゃねえよ」

そう、俺の頬にはケイティに切られた傷がある。まだ血が止まっていない。

「約束だからな。なんでも聞いてくれ」

そう言うリユーフインに、俺は言った。

「腹減ってるからな。取り敢えず飯食ってからだ。ただ、ひとつだけ聞かせてくれ」

「なんだ」

「バイト代もらえるのか」

俺はナジア・ハンターから目を付けられていた。たぶんリユーフインにも。そしてナジールでのケイティとリユーフインの言葉の端々から、組織対組織の攻防の印象が感じられたのだ。

「保証するぜ」

自信満々に請け負うリユーフイン。

「今、俺が現実世界でやってるバイトより額がいいのか」
「保証するぜ」

あさつての方向を向いて即答するリユーフイン。

わかりやすい奴だが、相棒としちゃイマイチだ。

「誰がイマイチだ！俺がいたから勝てたんだぜ、感謝しろよな」
女の子相手に喧嘩するのは嫌だが、アンドロイドならぶっ壊すまでだ。

どちらにしる、降りかかる火の粉は払うしかない。今日から俺はナジア・ガード。

「聞いてんのかしら」

俺の敵は、ナジア・ハンター。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7434m/>

ナジア・ハンター 1

2010年10月8日13時04分発行